

# 貨幣，意識，物象化

馬 田 哲 次

## I はじめに

本稿では、貨幣と意識との関係について考察する。人がプロセスを進めようとする場合、貨幣は重要な問題になる。一つには、何かをしようとする場合に、お金が無いと出来ないというごく単純なことである。更に重要なことは、「お金が欲しい人？」と尋ねたときに、ほとんど総ての人が、何の疑いもなく、「はい」と手を挙げることである。

貨幣は単なる交換手段であるはずである。お金はそのままでは何の役にも立たない。たかが数グラムの紙切れや、預金通帳にならんだ数字にすぎない。本当に必要としているのは、貨幣と交換に手に入れることが出来る「何か」である。或は、本当に欲しいものは、お金では手に入れることは出来ないかもしれない。その「何か」がなにかはっきりと分からないままに、ただ闇雲に貨幣を追い求めている。そして、貨幣に支配されて、本来の自分を見失っている。貨幣は富のシンボルであり、シンボルに支配されているのである。このことを本稿では物象化と呼んでいる。

この物象化が何故起こるか、物象化から抜け出すためには何が必要かを考察することが本稿のテーマである。

そのために、まず人間の意識の構造から考察する。物象化が起こるとき、人の意識、無意識がどのようなになっているかが分からなければ、物象化の本質は分からない。

次に、貨幣の本質を考察する。貨幣とは、人と人とを結びつけるための

何かを交換する手段であり、人類の歴史とともにあるものであると本稿では考える。

そして、市場の成立と共に、貨幣がシンボル化していくことを説明し、最後に、物象化から抜け出すために必要なことについて考える。

## II 人間の意識構造

貨幣を考察する前に、人間の意識の考察から始めよう。貨幣は人間が創り出したものであり、人間の意識を考察することなしには、貨幣の発生を説明し、貨幣の本質を理解することは出来ないと考えられるからである。

人間の意識の構造は、図1のようになっていると考えられる。この中で、貨幣を考察するのに特に関係があるのは、社会的無意識と、文化的無意識である。

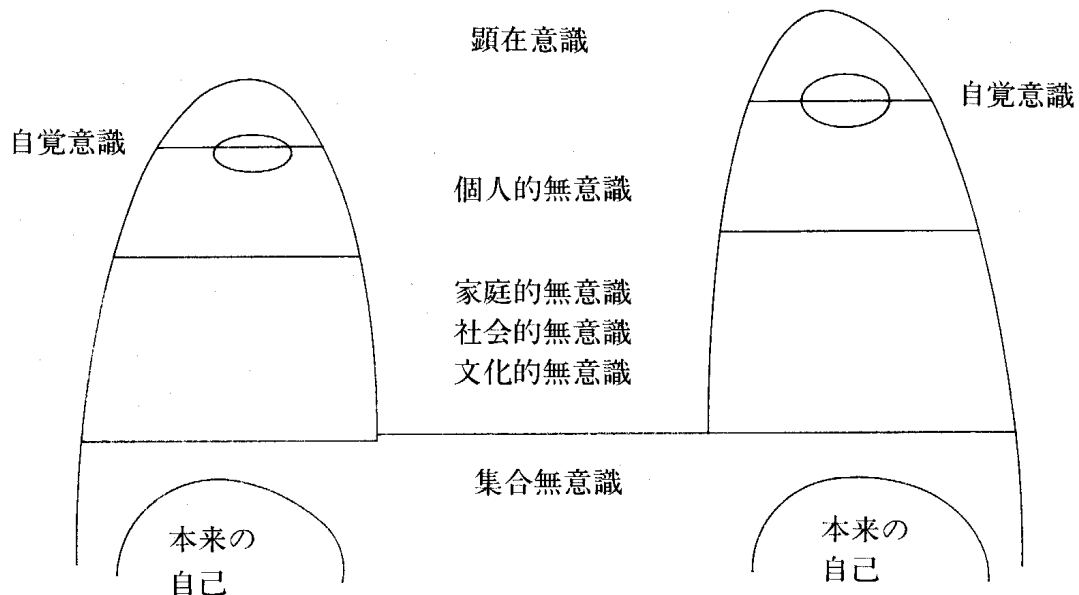


図1

社会的無意識とは、人が社会を形成するときに取り結んでいる暗黙の約束事である。慣習、制度といったものがこれに含まれる。奴隷制社会、封建社会、資本主義社会といったものもこれに含まれる。それが明確な形で表現されたものが、例えば実定法である。実定法とは、この社会的無意識の意識化に他ならない。法や、制度はこの社会的無意識が支えることによって実質的な効力を持つことができる。社会的無意識が支えることが出来なければ、法は死文化するし、制度は新しい制度にとって代わられることになる。そして、新しい制度に合わせて新しい法が制定される。

文化的無意識とは、人の社会が変わっても、なおかつ受け継いでいる文化に関する無意識である。代表的なものが宗教や伝統芸術である。キリスト教、イスラム教、仏教、神道といったものがこれに含まれる。それらの教えが意識化されたものが、教典である。聖書、お経等々である。

文化的無意識の奥に、集合無意識がある。集合無意識とは、人類はおろか、人類を超えた自然とも繋がった普遍的な無意識である。

この集合無意識の存在が意味していることは、人は本来一人では生きていくことが出来ない存在であるということである。

一人で生きていくことが出来ないと言うことは、今日のように、高度に分業が発達した社会においては自明のことである。自分が生活していく上において必要な財・サービスを全て自給することは不可能であるからである。

財・サービスの種類が少なくなり、自給できるものが多い社会では、人は自分一人で生活するようになるかといえばそうではない。人類は生まれたときからある種の集団・社会をつくってきたし、今後もそうであろう。通信手段が発達するにしたがって、見たこともない人ともコミュニケーションをとろうとしている。人と面と向かっては本音を語る事が出来なくても、パソコン通信では本音を語っている人も多いと言われている。逆に、日常生活では本音を語る事が少ないから、非日常的な世界での交流を求めているのかもしれない。

そして、人と人とが結び付くということの表われが交換である。ここでいう交換とは広い意味で使っている。贈与、略奪も広義の交換に含まれる。贈与、略奪は長期的に見れば交換ということが出来る。バレンタインデーとホワイトデーがいい例であろう。一方的に贈与が行われた後、一定期間、この場合は一ヶ月、の後に逆方向の贈与が行われる。また、このようにいうことも出来るであろう。人が贈与をするその瞬間に贈与する人も何かを相手からもらっていると。それは、ありがとうという感謝の言葉かもしれないし、喜ぶ笑顔かもしれない。そういうものが欲しくて贈り物をする人もいる。だから、贈ったとき、感謝の言葉が無いと人は怒るのである。

集合無意識で人と人とは本来繋がっているのだが、そのことをそのままでは意識することが出来ないから、或いは出来なくなったときから、意識化するために、何らかの形での交換形態を形作るのではないだろうか。

その交換形態を、文化的無意識に基づく、ある種の神秘的な、呪術的な力を借りて、造り上げる場合もあれば、社会的無意識に基づいた一つの制度として造り上げる場合もある。前者の例が例えばヴァイグアであり、後者の例が、例えば今日の貨幣である。

どちらの無意識に基づくものであれ、ある種の交換機能を果たしているという意味では、どちらの貨幣も同じであるが、その力の働き方が異なることになる。

### III 貨幣の機能

前節では、人間の意識の構造から、人と人とを意識的に交換を通して結びつけるものとして、貨幣が存在することを説明してきたが、今度は、貨幣の機能から、貨幣の本質的な機能を考察してみる。

貨幣の機能としては、経済学は通常つぎのものをあげている。

第一に、交換機能。

第二に、価値尺度機能。

第三に，計算機能。

第四に，最終的支払手段。

第五に，価値保存機能。

これらのなかで，最も基本的な機能は交換機能である。経済学ではよく，物々交換の不便さを解消するために貨幣が考えられたとする。このことから貨幣の交換機能がもっとも重要な機能であるということが言えるが，さらに，他の機能は交換機能を基にして導きだすことが出来る。

交換機能があるから，価値尺度機能がある。A財の $x$ 量は $p$ 単位の貨幣と交換され，B財の $y$ 量は $q$ 単位の貨幣と交換されるという事実があるから， $p$ と $q$ の大小を比較することによって， $x$ 量のA財の価値と， $y$ 量のB財の価値を比較することができる。

価値尺度機能から計算機能が導きだされる。様々の量の様々の財の価値を貨幣単位という同一の尺度に還元することによって，その貨幣単位を用いての様々な計算が可能になる。

最終的支払手段にも，交換機能があるからなることができる。

価値保存機能は，交換手段に将来もなりうるということが確実に予想されるから，果たすことができる。今日は交換手段になるが，明日はならないというのであれば，価値保存機能は持つことができない。このように考えてくると，貨幣とは，現在から将来にわたって交換機能を果たすことが確実に予想出来るものということになる。

従って，この機能を果たすものであれば，何でも貨幣になることができる。そして，この機能を果たすためには，信用が重要になる。交換機能を果たすということは，人が貨幣の受け取りを拒まないということである。そのためには，貨幣自体に何等かの価値があるものである必要が社会・経済の状況ではありうる。その場合は，保存がきき，少量で価値が高く，分割が容易だという物的な特性が要求される。この物的な条件を満たすものとして最適なものは金であった。しかし，金は食べることが出来ない。従って，食料に不足するような状況の下では，例えば米が貨幣として使われ

ることになる。

食料の不足もなく，社会・経済が安定すれば，貨幣はなにも物的なものである必要はない。今日では，銀行口座の数字が貨幣となっている。将来にわたって誰も受け取りを拒まないと確信できているから貨幣となりうる。そこで重要になるのが信用である。信用という共同幻想をその社会の総ての人がもっているからこそ貨幣として機能することができる。また，地震等の災害でコンピュータが壊れたりすると，場合によっては信用制度が一気に崩壊する可能性もある。そういう意味では，現代の信用制度は便利なようでその反面かなりの脆さを抱えている。

#### IV 貨幣の本質

以上みてきたように，貨幣の本質は，人間と人間を結びつける交換機能にある。貨幣がある人から別の人に渡るとき，それと逆方向に何かが渡るのである。それは，財・サービスのこともあれば，喜ぶ笑顔のこともあるし，支配欲を満たす場合もある。そして，貨幣がその機能を果たすためには，貨幣は手放さなければならない。貨幣を所有し続けることは，貨幣の本質的機能を果たさないことになるからである。社会の中で貨幣がその本来の機能を果たさなくなったときが社会の危機である。資本主義社会では恐慌がそうである。

#### V 貨幣の成立

ここで，貨幣の成立について考察してみよう。貨幣の成立については経済学では，交換の過程でその成立を説明することがよく行われる。マルクスの価値形態論がその代表的な例である。しかしながら，マルクスの説明には不十分な点も多い。それらのことを考慮しながら，合理的な経済人と交換を前提に貨幣の成立を説明してみよう。

まず，物々交換から始める。マルクスの価値形態論によると，「単純な，個別的な，または偶然的な価値形態」の場合である。この場合は，例えば， $x$  量の財 A と  $y$  量の財 B が交換される。マルクスはここで財の代わりに商品という言葉を使っているが，ここで商品という言葉を用いるのは問題がありはしないだろうか。財が商品という形態をとるのは，商品生産が一般化した商品経済の下においてであると考えられる。そして，商品経済は，資本主義的な貨幣の成立を前提とする。従って，この物々交換の段階で商品という言葉を用いるのは問題があると思われる。

ところで，この物々交換が成立するためには，かなり厳しい条件を必要とする。つまり， $y$  財を欲し， $x$  財を余分に持った人と， $x$  財を欲し， $y$  財を余分に持った人が出会わなければならない。出会う確率は，財の種類と市場にくる人の数，財を所有する人々の分布等々に依存し，財の種類が多くなるほど小さくなる。

また，マルクスは， $x$  量の商品 A と  $y$  量の商品 B とが交換されるとき，交換される財には同じ労働量が含まれているとしているが，物々交換の段階でそういうことが可能だろうか。可能であるためには，相手が所有している財を生産するのに，どのくらいの労働量が必要であるかを知っていなくてはならない。そのためには，それを実際に生産した経験が必要とされるのではないだろうか。そのためには，社会の規模が小さく，かつ自給自足に近い社会であることが必要とされる。

合理的な経済人の物々交換から話しを始めるためには，やはり，限界効用の比が等しいところで交換が成立すると考えるほうがいいと思われる。商品に凝固した労働量を考えてもいいが，その労働量に等しく交換されることは稀であろう。また，機械生産のように品質が一定でなく，生産する個人によって労働量が異なる場合が一般的ではないのだろうか。もしそうであれば，実際に交換されるとき，労働量は考慮にいれられないと考えられる。

さらに，様々な所で交換が行われる場合，その場所毎に交換比率が異な

るのが一般的ではないだろうか。交換する人毎に効用が異なるであろうし、その違いを知るための情報コストが大きいと考えられる。別の場所で有利な交換比率で交換していたとしても、それを知ることは難しい。価値がもし投下労働量で決められるとすれば、物々交換の段階では、不等価交換が一般的であろう。商品生産が一般的になり、貨幣経済が成立したときになって始めて、抽象的一般的な人間労働による価値法則が作用し始めると思われる。

何れにしても、物々交換の場合には、交換の成立が困難である。従って、誰でも交換に応じるような財に一旦交換した後に、目的とする財と交換したほうが効率がいい。従って貨幣が考え出されたらと経済学は教えているが、そこに重要な問題がある。一つは、誰でも交換に応じる財がどのようにして選ばれるかであり、もう一つは、それがどのようにして一般化するかである。

最初の問題から考察しよう。y 財を欲し、x 財を余分に所有している人(以下 A と呼ぶ)がいるとする。そこで、x 財を欲し、z 財を余分に所有している人に出会うとしよう。A は、x 財を z 財に交換し、その後に z 財を y 財に交換する間接交換の方法と、x 財と y 財とを直接交換する方法とのどちらが容易に交換可能かどうかを比較することになる。つまり、y 財と z 財のどちらがより交換可能性が高いかという問題である。

そのどちらの財が交換可能性が高いかは、社会の中である程度予測がつくと思われる。基本的に、自分が欲しいと思うものは、他の人も欲しい可能性があるということである。そして、その欲しいと思うものが、生存の欲求や安全の欲求を満たすものほど、一般的な交換可能性は高い。例えば、日本のように米が主食の社会であれば、米は交換可能性が高いという予測はつく。食料や衣類が交換財に選ばれることになる。

また、資本主義社会ではどのような商品を生産するかは、企業家が決定する。企業家は、どのような商品が売れるかの予測をするわけであるが、売れる商品を考えだすためには、自分の意識を深く探る必要がある。自分



だけが欲しいのではなくて、自分が欲しいと思い、人も欲しいと思うものは、意識の浅いレベルではなく、深いレベルを探ることによって知ることができる。これは、社会的無意識、文化的無意識、集合無意識を共有しているからである。従って、売れる商品を考え付く場合には、少なくとも社会的無意識レベル以上に深く探る必要がある。意識の浅いレベルで思い付いた商品は、より高次の欲求を満たすほど売れないのである。

以上述べたような予測をし、直接交換か間接交換を選ぶことになる。そして、間接交換を選べば、同時にその場合の財も選ぶことになる。予想通り間接交換がうまく行けば、次からその財を利用した間接交換を同様に行うであろう。間接交換がうまく行かなければ、別の財による間接交換が行われる。直接交換に要する費用が大きいほど、間接交換が試みられる度合が大きくなる。

Aがz財を用いた間接交換に成功すれば、それをまねる人が出てくる。そして、z財を用いた間接交換を行う人が、二人、三人、…と増えていき、社会の中である一定の割合を超えたとき、z財を用いた間接交換が、その社会に急速に広まることになる。このことの詳しいメカニズムはまだ解明されてはいないが、ユングの共時性の理論と形態形成場の理論を発展させることにより解明できるのではないだろうか<sup>1)</sup>。

また、場合によっては、z財だけではなく、それ以外の財も交換財として利用されることも考えられる。いわゆる金銀複本位制の場合がこれにあたる。交換財の量の変動する場合、交換財が複数あることは、交換を安定化させるのに役立つのではないだろうか。

信用を与える主体が存在しないところで、合理的な経済人と物々交換を前提に貨幣の成立を説明すれば、以上のようになるであろう。

信用を与える主体が存在する場合は、その主体の意志に社会の構成メンバーが合意する事によって、貨幣が成立する。その場合は、例えば法とい

---

1) ユングの共時性については、5)プロゴフを、また、形態形成場については、6)シェルドレイクを参照。

う形態をとることになる。その場合は、法を受け入れるということが、潜在的に人々の社会的無意識層に形成されていることが必要になる。

以上が、合理的な経済人と市場の存在を仮定した場合の貨幣の発生の説明であるが、歴史的に考えた場合、市場が存在する前から貨幣は存在していた。従って、貨幣の発生は、本来別の理論により説明しなくてはならない。

人類はもともと集合無意識を意識していたのではないだろうか。集合無意識はあらゆる自然とつながりを持っている。動物や植物は自然のバランスを崩すことはない。人類ももともとは、集合無意識を意識し、自然に従って生きていたに違いない。

ところがある時から、人類は火を使い、農耕を始める。自然に従う生き方から、自然に働きかけ、自然をコントロールする生活を始めた。そのときから徐々に集合無意識を意識しなく／出来なくなったのではないだろうか。

人類の大部分がそのようになったときでも、何人かの人は、まだ集合無意識を意識することができた。その人達はその宗教的な力によって、他の人々を支配したのだろう。そのとき、人々が互いに結びついていることを意識させるために考え出されたのが、ヴァイグアのような原始的な貨幣ではなかったのだろうか。その貨幣は、呪術的な力をもって、部族内を強制的に循環した。その強制力は絶対的なものであった。

社会の中で階級の分化が進み、他の社会との交易が始まり、商人が出現するようになった時から、次の貨幣の段階に進む。つまり、貨幣が部族内を循環していたときは、宗教的な力によった交換機能を果たしていたものが、他の社会と財の交換機能を果たし始めたときから、価値の保存機能を持ち、富の一形態となり始めるのである。

すると、貨幣＝富を蓄積することを目的とする人々が出現することになる。しかしながら、貨幣を蓄積することは、本来の貨幣の目的からははずれたことになる。もともとは、貨幣が交換されるとき、貨幣と反対方向に

財が循環することになっていたのが、貨幣を蓄えることにより、財の循環が滞ることになるからである。

もともとの貨幣は文化的無意識が意識化されたものであり、富を蓄える手段としての貨幣は、社会的無意識の意識化である。従って、最初のうちは、貨幣を蓄えることを目的とすることは、倫理的にいけないこととされたのである。無意識層は深いほど人に与える影響力が強い。そして、深い無意識層が意識されたものが、直接人々の行動を規定するのである。このころは、まだ文化的無意識の倫理、宗教と言ったものが意識されていたので、貨幣を直接蓄えることに歯止めがかかっていたのである。現代でも、宗教の規律・制度が厳しいところは資本主義化がうまくいっていないが、それも同様の理由からである。

そのうちだんだん商人が蓄える貨幣の量が増え、社会の中で影響力を増してくる。そして、宗教革命が起こる。貨幣を蓄えることは、神の意志にそうものであると。このときから、文化的無意識の宗教的、倫理的歯止めがなくなり、直接貨幣を蓄えることを目的とすることが認められていったのである。

このように見てくると、貨幣は本来、呪術的な力を背景に強制的に循環し、交換機能を果たしていたものであるということが出来る。それが時代がたつに従って、他の機能を果たすようになってきたと考えることができる。

資本主義の下での貨幣になっても、貨幣本来の強制的に通用し、交換機能を果たすと言うことは、基本的に変わっていないのである。従って、貨幣は手放され、財が交換されるときに経済の状態はよくなっている。人々が貨幣だけを所有しようと思えば、経済は不況になるのである。

## VI 信用の形成

貨幣は金から紙幣になり、紙幣から、預金等の信用貨幣とでもよべるも

のに変化してきた。この信用がどのようにして形成されるかは重要な問題であるから、ここで簡単に考察しておこう。

現在の資本主義社会における貨幣の成立を考えてみよう。

最初貨幣は金であった。金は本来貨幣ではないが、貨幣は本来金であるというマルクスの言葉があるように、貨幣は最初は金であった。強力な信用を与えることが出来る主体が存在しない場合は、貨幣は、物的に価値を持つものが選ばれざるを得ない。政権が目まぐるしく交代するような政治的に不安定な国では、今日でも何等かの物的な物が貨幣となっている。金はそれ自体価値があるとともに、貨幣としてのすぐれた物質的性質を持っているために、貨幣に選ばれた。

しかしながら、物的な金を取引毎に正確に秤量して交換するのは不便であるし、流通している過程で、磨耗してしまう恐れもある。従って、国家がその金含有量を保証することが考えだされた。金貨が一定量の金を含有することを保証し、その含有量に対して、ある貨幣単位の名称を与えるのである。このことによって、取引の度毎に、金量を秤量するという手間が省けることになる。

しかしながら、金貨は重いし、流通空費の問題もある。そこで登場したのが、兌換紙幣である。紙幣自体には価値が無いが、いつでも一定量の金貨と交換されるのが保証されているので、問題はない。

兌換紙幣で交換をすることが一般化し、それがかなりの期間にわたって持続すると、紙幣だけで十分だということがわかる。不換紙幣の登場である。不換紙幣が流通するためには、不換紙幣でも十分であるということが、人々の社会的無意識層に形成されていることが必要になる。これは、貨幣の形態が変化するときにはいつでも同様に必要とされることである。

銀行口座の発達により、口座に預金残高があると、いつでも貨幣に換えることが出来るようになった。最近では、コンピュータの発達により、取引の際に、口座の書き換えだけで済ませることが瞬時に出来るようになった。こうなると、紙幣さえも必要ではなくなる。

このように、多くの人は変化よりも安定を好み、一般化すると安心するという人間の本性により、徐々に信用が形成されてくることになる。新しい形態に変化するときは、その受け入れが社会的無意識に形成されていることが必要になる。飛躍してはだめである。金貨から、一足飛びに不換紙幣を流通させようとしてもだめである。そして、価値を安定させることが信用を持続させるために最も重要なことである。

## Ⅶ 物象化

資本主義社会の貨幣問題の最大のものは物象化である。それは、人の正常な発達を妨げるからである。人の欲求は、本来生存の欲求から自己実現の欲求へ高度化していくはずであるが、貨幣を盲目的に求めることにより、自己本来の欲求が分からなくなり、欲求の高度化が図られなくなるのである。

貨幣は、人類が普遍的に持つ集合無意識とその表われである交換性向と結び付いて存在する以上、貨幣は人類の歴史とともに存在することになる。しかしながら、物象化という問題は、資本主義に固有な問題である。

資本主義社会で何故物象化という問題が生じるかという、それには次のような要因が考えられる。

第一に、生産される財・サービスの種類が増えたこと。

第二に、分業が進み、自給自足の経済ではなくなったこと。

第三に、身分制度がなくなり、自由になったこと。

第四に、効用があり稀少なものが富であり、貨幣は富のシンボルであること。

第五に、貨幣欲への倫理的歯止めがなくなったこと。

第六に、生存の欲求を満たすために貨幣が必要とされること。

これらの要因の中で、最も大きい要因は、第四、第六の要因ではないだろうか。

効用があり、稀少なものが富である。それは市場で取引されるものである。そして、貨幣と交換に富を手に入れることが出来る。ある財を手に入れる手段にすぎなかった貨幣が、逆に貨幣と交換にあらゆる商品、つまり富を手に入れることができるようになったとき、貨幣は富のシンボルとなる。

人はシンボルを追い求め、シンボルに支配されるようになるが、このシンボルは社会的無意識から形成されたシンボルである。シンボルを共有する人々が、そのシンボルの交換を通じて結びつくことになる。例えば、円というシンボルの交換を通じて、日本人が結びつくことになる。

しかし、社会的無意識は文化的無意識より浅い意識の層であるため、貨幣シンボルを追い求めることによって、本来の自己から遠ざかり、本来の自己が分からなくなる。そして、「お金が欲しい」、「お金で買えないものはない」、「世の中お金が全てだ」ということを考える度に、貨幣観念が強化され、貨幣を通してしか価値判断が出来なくなるのである。顕在意識の層に貨幣観念が形成される結果、ますます集合無意識を意識出来なくなり、人と人とが直接的に結びつくことも難しくなるのである。こうなると、貨幣欲への倫理的歯止めは実質的になくなるのである。

また、マズローは人間の欲求5段階説を唱えたが、その第一の欲求である生存の欲求を満たすために貨幣が必要とされるのも、物象化が生じる根本的な原因の一つである。奴隷制度や封建制度の下では、様々な自由は束縛されているが、奴隷主や地主による一定の保護がある。また、生存の欲求を満たすために貨幣はあえて必要とされない。そのほとんどが自給でまかなわれていたからである。従って、食料が直接の欲求の対象になることはあっても、貨幣が欲求の直接的な対象になることはないのである。

さらに、貨幣は他の欲求をみたすことも出来る。安全の欲求は貨幣で手に入れることができる。様々な防犯警報装置や警備員を貨幣で買うことはできる。

愛と所属の欲求も一部貨幣で満たすことが出来る。愛していることの、

あるいはある集団に属していることの証しとして贈り物をするのはよくあることである。贈り物は、貨幣で買うことができる。

また、貨幣を多く持つことによって承認の欲求を満たすことが出来る。その人の給料がどれくらいであるか、また企業の売上高や利益がどれくらいであるかは貨幣で量られる。貨幣量が多いほどその人や企業は優秀であり、社会から認められていることになる。さらに、貨幣は人の欲求として重要な権力欲や支配欲とも結び付く。人を動かそうとするときに金は大きな武器となる。

最後に自己実現欲求を満たすためにも貨幣が必要になる。何か自分が本当にやりたいことをやる場合には、様々な財を購入する必要がある。また、株式会社を設立する場合には、最低1,000万円必要である。もっとも自己実現する場合には、様々な援助者が現れて、必要とするお金は少ない場合もあるかもしれない。

このように、貨幣は富のシンボルであり、五つの欲求の全てにわたって、それを満たすためには貨幣が必要とされ、また貨幣があるとその一部を満たすことができる。追い求めないのが不思議なくらいである。

## VIII 物象化から抜け出すために

物象化から抜け出すためには、個人のレベルで行えることと、社会的な規模で行わなければならないことがある。個人的な努力だけで物象化から抜け出すことが出来る人もいる。しかし、全ての人がそう出来るとは限らないために、社会的なレベルで行わなければならない場合があるということである。

個人的レベルで行う場合には、社会的無意識よりも深い無意識を意識化させる必要がある。つまり、文化的無意識を意識化させるか、集合的無意識または本来の自己を意識化させる必要がある。

文化的無意識を意識化させるということは、ある種の宗教的倫理観に従

って生きるということである。現実でもある種の宗教を信仰する人は貨幣を求めることが少なくなってくる。このようなことが一般化すれば資本主義社会の存続がかなり危機的な状況に陥ることになる。

集合的無意識または本来の自己を意識化させるためには、闇雲に貨幣を求めず、自分が本当に欲しいものをはっきりさせることが必要になる。貨幣はただの交換手段にすぎないことを意識し、貨幣を持つことによって、何が手に入るのかはっきりさせることである。欲しいものは、貨幣では手に入らないかもしれない。また、貨幣がなくても欲しいものは手にはいるかもしれない。そこをはっきりさせることが絶対に必要である。このことは、プロセスを進める労働を行う場合にも、また、プロセスを進める消費を行う場合にも必要なことである。そういう意味では、プロセスを進めるということが何よりも大切であり、それが出来ればほとんどの問題は解決することになる。

そのために重要なのは、教育の改革であろう。自分が本当に欲しいものが分からなくなっているところにも、物象化の原因の一端がある。子どもは生まれたときは、自分が必要なものが何であるか分かっている。そしてそれを表現する。親の価値観や知識を無理矢理子どもに押しつけることによって、子どもは自己本来の欲求が分からなくなっていく。従って、子どもが本来持っている方向性を伸ばしていくような教育が必要とされる。興味を持ったものを伸ばしてあげるか、興味を引き出すような教育をしないとダメである。自分が欲しいものが何であるかはっきり分かっているならば、貨幣は単なる交換手段にすぎないであろう。

以上が個人的な解決の方法であるが、個人的な努力では限界があるために社会的に行う必要がある。そのときに重要なのは、生存の欲求と安全の欲求を確実に満たすということが必要になる。物象化が起こる社会経済的根本的原因は、貨幣がなければ生存の欲求も満たせないところにある。確実に食べていけるという状況のもとで、人は余裕を持ち、自分が本当に欲しいものを見つけるゆとりも出てくる。生活の保障をすれば人は働かなく



なるという考えもあるが、それはごく一部の場である。人は様々な潜在能力をもっており、その能力を完全に活かしながら生活をしたとき、本人もその回りの人々も幸せになることができる。従って、ゆとりが生じたときに、その人らしく生き始めるのがその人本来の姿ではないだろうか。

それを資本主義社会の中で制度化しようとするれば、所得政策と分権的システムが必要になるであろう。所得政策は、最低限の生活を保障するためのものであり、分権的システムは、政府の肥大化を防ぐために必要である。官僚制は自己増殖する傾向がある。一度創られると、組織が硬直化し、不必要になったとしてもなかなかなくなる。時代の変化に対応して柔軟に変化するシステムが必要になる。

また、「富」の概念を変えていくことも必要になる。富の概念が変わらない以上、貨幣は富のシンボルとしてあり続けることになる。

## IX まとめと今後の課題

本稿では、貨幣の本質を人間の意識との関係から論じてきた。貨幣の本質的な機能は交換機能である。交換を通じて人と人とが結び付くのである。資本主義の貨幣は、社会的無意識層の顕在化である。それは文化、宗教、倫理に関係なく、強制的に流通する力を持っている。そのことは、地球上の人々が交換に参加することにより、地球上の人々を結び付けるという効果を持つ。しかしながら、人と人との直接的な繋がり、財・サービスの交換の背後に押し遣られてしまう。貨幣の動きに飲み込まれ、自分自身を見失ってしまう。

この物象化から抜け出すためには、人々が社会的無意識よりも奥にある、文化的無意識、集合無意識、本来の自己を意識化する必要がある。それを助けるために、経済システムは、人々の生存の欲求と安全の欲求を満たすように創られなければならない。

そのためには、所得政策と、分権的なシステムが必要とされるが、具体

的にどうすればいいのか、税制を変えるだけで資本主義の枠内で可能なかどうかの研究は、今後の大きな課題の一つである。

また、本稿では考察しなかったが、資本主義社会における貨幣の重要な機能として、情報機能がある。財の需要量、供給量を知るための重要な機能である。この機能はもっと深く考察する必要がある。

#### 参考文献

- 1) フランケル, S. H., 吉沢英成訳, 『貨幣の哲学 信頼と権力の葛藤』, 文眞堂, 1984年
- 2) ホイト, E. E., 『交換のアンソロポロジー その原始心性と経済の統合』
- 3) マルクス, K., 大内兵衛・細川嘉六監訳, 『資本論 マルクス=エンゲルス全集 第23巻第一分冊』, 大月書店, 1965年
- 4) Menger, K.(1892), "ON THE ORIGIN OF MONEY", *THE ECONOMIC JOURNAL*, Vol.II : 239-255
- 5) プロゴフ, I., 河合隼雄, 河合幹雄訳, 『ユング心理学選書⑫ ユングと共時性』, 創元社, 1987年
- 6) シェルドレイク, R., 幾島幸子, 竹居光太郎訳, 『生命のニューサイエンス』, 工作社, 1986年
- 7) 吉沢英成, 『貨幣と象徴』, 日本経済新聞社, 1981年